

白山の自然誌 13

# クマタカとイヌワシ



石川県白山自然保護センター

## はじめに

白山に生息するワシタカ類の中では、なんといっても県鳥イヌワシがよく知られています。しかし他にも何種類か生息しており、一年中いる鳥の中ではイヌワシに次いで力の強いのがクマタカです。白山自然保護センターでは、昭和52年度からイヌワシを調べ初め、その結果を白山の自然誌4「イヌワシの生態」などで紹介してきました。当時、山でイヌワシを探していた時には、クマタカはほとんど見ることはできず、白山にはあまり生息していないのではないかと考えられていました。

センターでは、昭和60年度から平成元年度まで、環境庁委託の「人間活動との共存を目指した野生鳥獣の保護管理に関する研究」で、白山地域ではイヌワシとクマタカを取り上げて調査しました。その中で、特に今までほとんど未知の状態であったクマタカに重点をおいて調べたところ、各地で次々とクマタカの姿を発見でき、生態について少しずつ分かってきました。まだまだ十分とは言えませんが、明らかになったクマタカの生態を、イヌワシと比較しながらみていくことにしましょう。

表紙	クマタカの巣(K) アカマツの大木の枝 に架けられた巣の親 鳥と生まれて約20日 の雛
裏表紙	クマタカ幼鳥(U)

## クマタカとイヌワシ

ワシタカ類の体の特徴	2
若鳥と成鳥	3
世界と日本での分布	4
分布と生息環境	
白山地域の分布	5
生息環境	5
営巣地	7
一年間の生活	9
餌	12
行動圏と行動様式	
行動圏の面積と構造	13
テレメトリー調査とクマタカ幼鳥の行動圏	14
行動様式	15
クマタカとイヌワシを見つけよう	
識別点	17
季節	17
場所	18
探し方	18
ワシタカ類の保護	
ワシタカ類の現状	19
保護の必要性	19
保護のために	20
おわりに	21

## クマタカとイヌワシ

### ワシタカ類の体の特徴

ワシタカ類は、餌となる動物を捕るため、よく見える目と、鋭い爪のある脚（あし）と、鋭い嘴（くちばし）を持っているのが体の大きな特徴です。目は顔の前面にあります。これは動きのある獲物をとるためには、距離感を正確につかむ必要があるからです。また、ヒトに比べると視細胞が細かいことや、特別な組織をもっているなど、ヒトなら見逃してしまうような遠くの小さい動物を見つける優れた視力を持っています。

脚は頑丈で握る力が強く、指の裏面には、こぶ状の部分があり、獲物をしっかりつかむのに役立っています。爪は太くて鋭く、特に内趾（親指）と外趾（人差指）の爪が強力で、獲物をつかみ締め付けるようにできています。

嘴は、上嘴が下嘴より長く、上嘴の先は下嘴の先を覆うように下方に曲がっていて、獲物の肉にくいこむとともに、切り取るはたらきがあります。

ワシタカ類の中でもクマタカやイヌワシの仲間は大きな獲物を捕るため、とくに強力な脚と嘴を持っています。



クマタカの頭部（U）



クマタカの脚（U）

## 若鳥と成鳥

イヌワシの成鳥は、白山に生息するワシタカ類の中では最も黒っぽく、全身黒褐色で後頭部は黄金色を帯びています。若鳥の間は両翼の中央部と尾羽に大きく白い部分があるのが特徴で、遠くからでもよく分かります。一方クマタカはイヌワシに比べると白っぽく、上面は暗褐色、下面は多数のしま模様があるが全体的に白っぽく、特に若鳥は白い。イヌワシは翼が幅広くて長いのに対して、クマタカは翼の後縁がふくらんでいて、イヌワシに比べると丸くて短い感じがします。この体のつくりから、イヌワシは旋回飛行や遠距離の滑空に向いており、クマタカは林の中の移動などイヌワシに比べると小さな動きもうまくできます。

体の大きさは、イヌワシが全長（まっすぐにしたときの、嘴から尾羽の先端までの長さ）が約80～90cm、翼開長（翼を広げたときの両翼の端から端までの長さ）が200cm前後、クマタカはイヌワシより少し小さく、全長が約70～80cm、翼開長が150cm前後です。そしてどちらも、雌の方が雄より大きく、つがいで飛んでいると、はっきり大小で区別できるくらいです。なお県内で保護されたクマタカと、死体で見つかったイヌワシの計測値は表のとおりです。



イヌワシ幼鳥



クマタカ成鳥



保護されたクマタカ幼鳥（U）

種 名	クマタカ	イヌワシ
発見年月日	1989.12.4	1985.1.13
発見場所	石川郡鶴来町	金沢市奥新保町
性 別	雌（幼鳥）	雌（成鳥）
全 長	765 mm	870 mm
翼 開 長	165.5cm	201 cm
翼 長	520 mm	640 mm
尾 長	352 mm	350 mm
嘴 峰 長	45.4mm	42.5mm
跗 蹠 長	113.6mm	120 mm
体 重	2900 g	2790 g
計 測 日	1989.12.5	1985.1.14

クマタカとイヌワシの計測値

（クマタカは生体、イヌワシは死後数日以内で餓死状態であった。）

## 世界と日本での分布

イヌワシは、ヨーロッパ、アジア、北アメリカなど北半球に広く分布し、森林や岩山のある山岳地帯や半乾燥の高原地帯に生息しています。一方、クマタカの分布は限られており、ヒマラヤから中国南部、日本などに分布し、山地のよく繁った森林地帯に生息しています。

日本では、イヌワシは北海道から九州まで記録されていますが、主に本州に広く分布し、東北から北陸にかけての山地が分布の中心です。それに比べてクマタカは、全国に広く分布しています。

## 分布と生息環境

### 白山地域の分布

イヌワシは、県内には金沢市以南の山地に広く分布しており、約20か所に合計40～50羽が生息しています。これはアンケートなどで情報を集めたり、県内各地の山へ入っての数年間にわたる調査の結果です。数か所に調査員を配置した同時観察などで、つがいの区別をして明らかになった数です。調査してから、すでに10年ほどたっていますが、数の大きな変化はないと思われます。クマタカについては、全県にわたる調査はなく数は不明ですが、イヌワシと同じく金沢市以南の山地に広く分布していることは分かっています。いずれも能登地域での生息は知られていません。

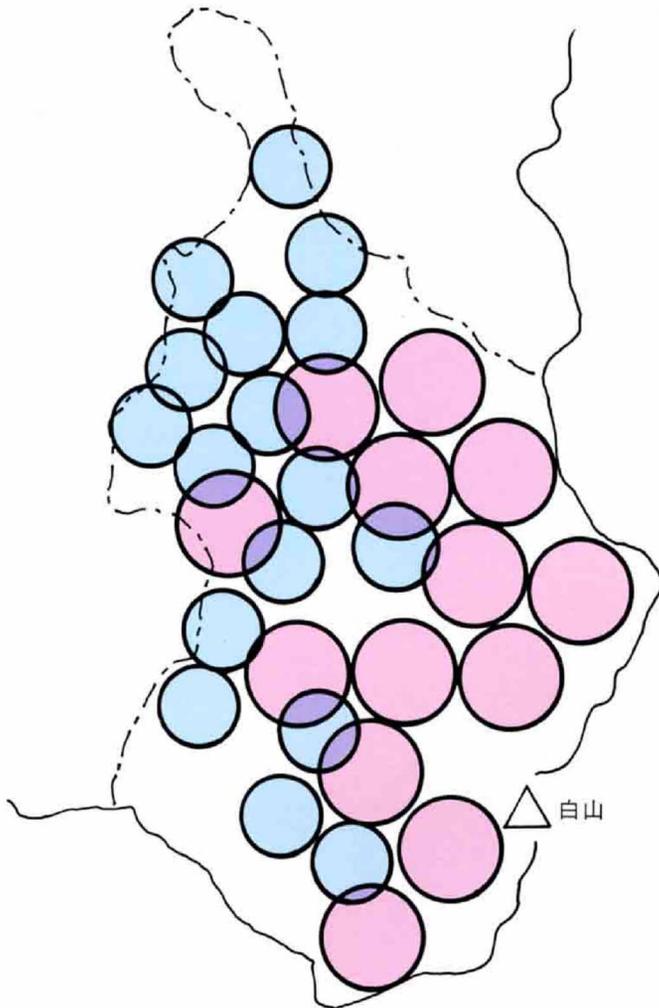
6ページの図は、調査が比較的進んでいる白山地域（鶴来町・鳥越村・河内村・吉野谷村・尾口村・白峰村）での、イヌワシとクマタカの分布をつがいに区別して示してあります。調査の十分でないところもあり、一部は推定で表しました。イヌワシが13か所、クマタカが17か所で明らかとなりました。図からも明らかのように、この地域では2種は、かなり偏った分布をしていることが分かります。

### 生息環境

白山地域の標高は、白山を最高に、北西方向に行くにしたがって低くなっています。分布図をみると、標高の高いところにイヌワシが、標高の低いところにクマタカがいますが、全国的にみると南アルプスや中央アルプスなど、標高の高いところにもクマタカが普通に生息しており、単に標高の違いで2つの鳥の分布が決まっているわけではないようです。

白山地域で、2つの種の記録された場所の地形や植生などを詳しく調べたところ、次のようなことが分かりました。イヌワシは地形の急峻なところ、草原や低木林が多いところ、そして集落や道路など人為環境の少ないところに生息しています。急峻な場所の岩場に巣を架けたり、開けた環境で餌を探したり、人間活動を避ける傾向が強いためと考えられます。それに比べてクマタカは、高木の林があれば、スギの植林地が多いところや集落のすぐ近くでも生息しています。森林との結び付きの強い鳥のようです。そして、2つの種が出合ったときにクマタカがイヌワシから攻撃されるのが観察されているように、イヌワシの方がクマタカより優勢です。イヌワシのいるところにはクマタカはすみに

○ 金沢



白山地域のクマタカとイヌワシの分布  
(●クマタカ ●イヌワシ、実線は)  
(県境、破線は市町村界)



イヌワシの生息環境

くいと考えられます。このような2つの種の力関係と、イヌワシに適したいくつかの環境が、より標高の高いところに偏っていることで、生息場所を分けているものと考えられます。

なお、能登地域にはクマタカもイヌワシも今までに記録されていません。森林はあるものの、ある程度の標高のある山地はなく、人為環境が多くて連続した生息に適する自然環境がないことが原因でしょう。

### 営巣地

イヌワシは、深い谷の中の非常に急峻な場所の、切り立った岩場や大木に巣を架けます。県内では現在分かっている巣はすべて岩場にあります。雨や雪、直射日光などを防げるような、上部がひさし状になっていたり、岩壁のくぼみとなっている場所の岩棚です。一方クマタカは、大木がある程度以上かたまって生えている森林の中の、特に大きな木に巣を架けます。白山地域で分かっているのは、アカマツ（胸高直径88cm、樹高約18m）とクリ（胸高直径65cm、樹高約16m）です。一般的にはアカマツやモミなど針葉樹が多いようです。地形的には、稜線部でも谷底でもない中腹で、中間部より下方に位置する急峻な場所に巣が見つかる傾向が強いことが分かっています。

2つの種とも、巣の大きさは直径1～1.5mで、巣材には周辺に生えている樹木が使われます。育雛期間中も連続して運び込まれ、特に青葉の付いた枝をよ

く運びます。白山地域ではクマタカでヒノキ、ミズナラ、コナラ、ホオノキなど、イヌワシでスギ、ヒノキ、ブナ、ミズナラなどが記録されています。

日本でも、雪の少ない地方ではイヌワシは大木に巣を架けているところもありますが、上記のような条件は、白山のような豪雪地では、冬に巣造りするイヌワシにとってはどうしても必要なことです。また特にイヌワシは人間活動を避ける傾向が強く、そのような場所は、巣造りから雛が生まれるころの大事な時期は、深い雪に被われて人が入っていけないので、イヌワシにとっては助かっています。一方クマタカは、すべて木に巣を架けていますが、巣造りがイヌワシより1~2か月遅く、雪の心配があまりない時期なので可能なのでしょう。また大木のかたまって生えている森林は、人間活動から身を隠せる場所となっているからでしょうか、白山地域では集落のすぐ近くにも巣が見つかっています。



クマタカの巣



イヌワシの巣

# 一年間の生活

イヌワシやクマタカの巣造りは冬に始まります。イヌワシでは、巣造りの前にあたる10～11月ころから、つがいの2羽で活発に行動するようになり、2羽が接近して飛んだり、飛びながら急降下と急上昇を繰り返す波状飛行がよく見られます。雌雄の結び付きを強めたり、隣接するつがいへのなわばり宣言を表すディスプレイ（誇示）です。クマタカも同様な飛行が12～1月ころから多くなります。本格的な巣造りは、イヌワシでは12～1月、クマタカでは1～3月です。巣材の多くは巣の近くの林から運び、吹雪の中でも連続して運んでいるのが見られています。産卵はイヌワシで2月、クマタカで3～4月で、産卵数はイヌワシが2個、クマタカが1個が普通です。抱卵は雌が中心に行い、抱卵期間はイヌワシで42～45日くらい、クマタカで45～47日くらいです。

孵化はイヌワシで3～4月、クマタカで5月になります。ともに孵化後約1か月間の、雛がまだ小さいときは雌が巣に残り雛を抱いたり、運ばれてくる餌を引き裂いて与えたりしています。そのころになると、全身白かった羽にも少しずつ黒くなり始め、以後急速に変化していきます。雛の食欲もし

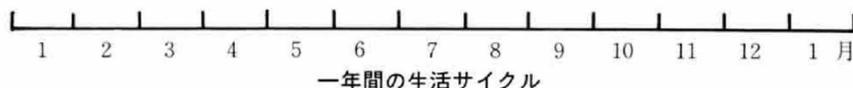


イヌワシのつがいのディスプレイ飛行

## クマタカ



## イヌワシ





孵化後約30日の羽ばたき練習をしているクマタカの雛 (K)



孵化後約60日のクマタカの雛〈下〉と親鳥 (K)



巣立ち直前のクマタカの雛 (K)

だいに増し、雌雄で餌を運ぶようになります。育雛期間は約2か月半くらいで、イヌワシでは5月下旬～6月、クマタカでは7～8月上旬に巣立ちします。なおイヌワシの場合、日本では普通は先に生まれてより力の強い雛しか育たず、2羽とも巣立った例は稀にしかありません。イヌワシの幼鳥は一度巣を飛び立つと戻ってくることはほとんどありませんが、クマタカでは近くに止まっていたり巣に戻ることもあり、巣立ちの判断をしにくいようです。

イヌワシやクマタカが、天候の悪い真冬に巣造りを始めなければならない理由は、このように巣造りから雛の巣立ちまでに約半年もかかることと、雛が最も餌を必要とする時期が、ちょうど山の中に餌となる動物が多い時期になっているからだったのです。

巣立った幼鳥は、すぐには自分で餌を捕ることはできず、親が運んでくるのを待っています。そこでイヌワシでは1～2か月、クマタカでは半年くらいは、巣の周辺の狭い範囲しか動きません。やがて餌の捕り方を学び、巣造りの始まるころには独立していかなければならないはずですが、中には次の営巣期にも周辺に留まる個体がいるようです。



巣にヘビを運んできたクマタカ (K)

## 餌

山の中でクマタカやイヌワシが餌を捕ったり、それを食べたりしているところは、なかなか目撃できるものではありません。そこで餌の種類や数を明らかにするには、一般的には営巢中の巢内に運ばれてくる餌を記録する方法がとられます。この方法を中心にしてイヌワシとクマタカの餌を調べた結果が表です。

イヌワシの主要な餌はノウサギ、ヤマドリとアオダイショウなどのヘビ類であることが分かります。全国的には、餌の種類は同様ですが、数としてはノウサギの比率が半数以上と高くなっています。クマタカの餌は調査が十分ではありませんが、ノウサギ、ヤマドリ、アオダイショウなどイヌワシと同じ傾向であるのが分かります。

イヌワシの餌の種類  
(石川県内7つがい)

種	名	例数	%
爬虫類			
	アオダイショウ	23	16.0
	ジムグリ	7	4.9
	シマヘビ	4	2.8
	ヤマカガシ	1	0.7
	マムシ	1	0.7
	不明ヘビ	26	18.1
鳥類			
	ヤマドリ	30	20.8
	カケス	8	5.6
	カワガラス	1	0.7
	ヤマガラ	1	0.7
	不明	2	1.4
哺乳類			
	ノウサギ	38	26.4
	カモシカ	1	0.7
	不明(中型)	1	0.7
合	計	144	100.0

(池田他、1986を改変)

クマタカの餌の種類  
(白山地域の1つがい)

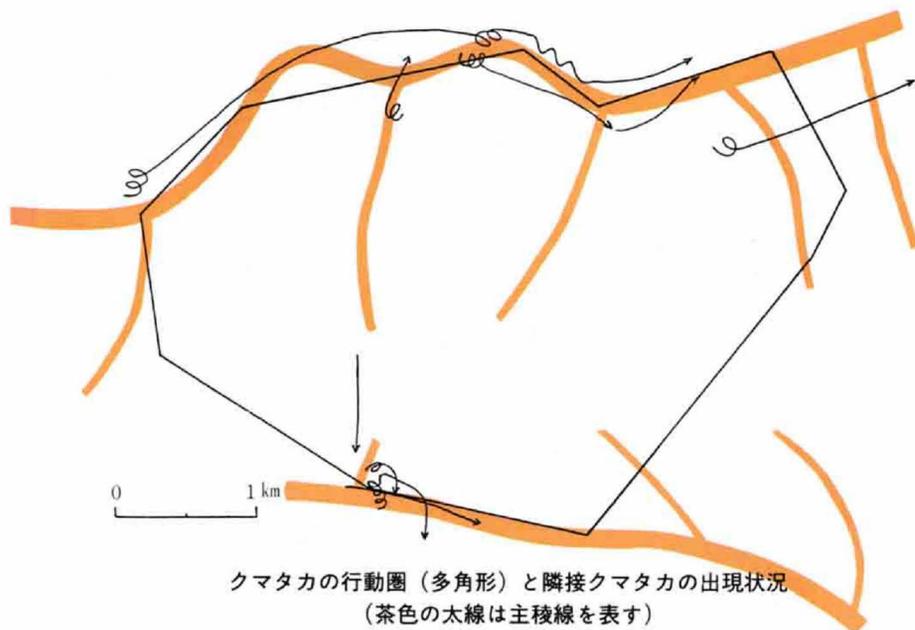
種	名	例数	%
爬虫類			
	アオダイショウ	2	20
	シマヘビ	2	20
	ジムグリ	1	10
鳥類			
	ヤマドリ	2	20
哺乳類			
	ノウサギ	3	30
合	計	10	100

## 行動圏と行動様式

### 行動圏の面積と構造

クマタカもイヌワシも、基本的には留鳥として、つがいで一年中同じところにすんでいます。そして、ある程度決まった範囲内で行動しています。その範囲を行動圏といいます。これを調べるため、観察点をいくつか設けて人を配置し、複数のつがいの飛行の同時観察を繰り返して記録を集めました。そして、あるつがいの飛行記録を1枚の地形図に記し、その最外郭を結んで行動圏としました。

白山地域の行動圏の面積は、クマタカでは約11~12km<sup>2</sup>、イヌワシでは約20~30km<sup>2</sup>となりました。調査した場所周辺は、ともに別のつがいが連続して生息している密度の高いところです。この値は、各地で調べられたイヌワシの全国平均値である約60km<sup>2</sup>や、クマタカでわかっている10~48km<sup>2</sup>などに比べると狭い値です。行動圏の広さは、営巣に適する場所の分布状況、餌となる動物の量やその捕りやすさ、その地域での混み具合などによって違ってくると考えられます。



白山地域は他地域より、イヌワシやクマタカの生息に適した環境であるのかもしれない。

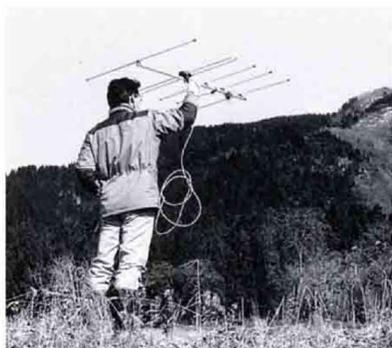
次に、隣接してつがいがいる場合、その境界が山の稜線となっていることが多く、稜線で囲まれた谷が一つがいの行動圏となっているようです。このことはイヌワシで顕著で、クマタカでも傾向は同じでした。谷が大きければ、その上流と下流で別のつがいが生息し、谷が小さいときはいくつか合わさって一つの行動圏となっています。

2種を比べると、イヌワシの方が自分のなわばりを防衛する意識が強く、境界がかなりはっきりしています。クマタカの行動圏は、かなり重なり合っているようでした。

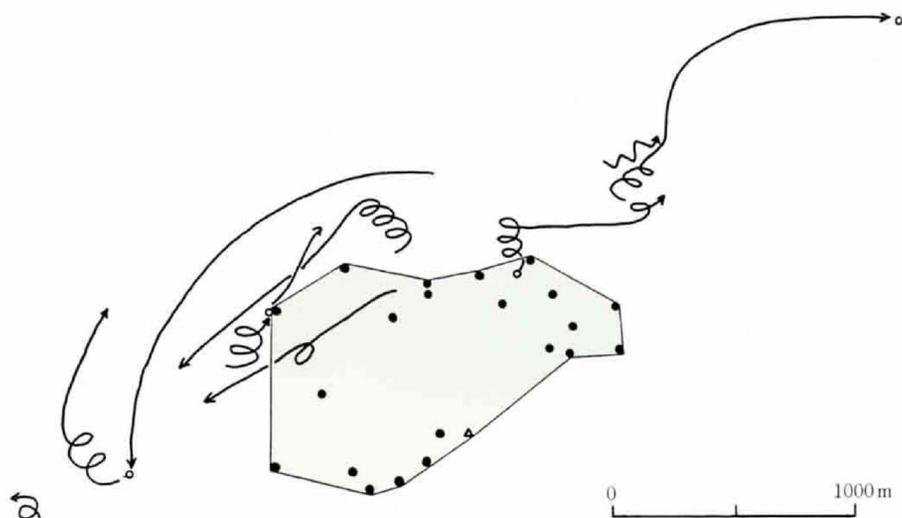
### テレメトリー調査とクマタカ幼鳥の行動圏

森林の中で生活し、止まっていることの多いクマタカは、発見したり飛行を連続して追跡することは並み大抵のことではありません。動物の行動を調べる方法の一つに、テレメトリー調査があります。電波を出す発信機を動物に付け、トランシーバーで受信して、アンテナでその電波のくる方向を知ること、見えない動物の居場所を突き止めながら行動を追っていくのです。

民家の窓ガラスに衝突して保護されたクマタカの幼鳥（4ページ参照）に発信機を付けて放し、その行動を追跡しました。発信機が落下したため、8日間の行動しか記録できませんでしたが、目視ではほとんど追えなかった行動が分かりました。それによると、幼鳥は放した場所から約800m以内の林の中で、小規模な移動をするのみで、8日間の記録を合わせた行動圏の面積は1.07km<sup>2</sup>となりました。他の県での調査でも、同様に巣の周辺からほとんど動いていないことが分かっており、クマタカの幼鳥は巣立ってから半年くらいは、ごく狭い行動圏しか持たないようです。



テレメトリー調査風景



クマタカ幼鳥の行動圏と親鳥の飛行トレース  
 (△放鳥位置、●発信機による確認位置)

### 行動様式

行動を追跡することが困難なクマタカやイヌワシですが、調査の積み重ねや、観察条件に恵まれたつがいがいたおかげで、これらの鳥がどのような行動をしているかが、少しずつ明らかになりました。

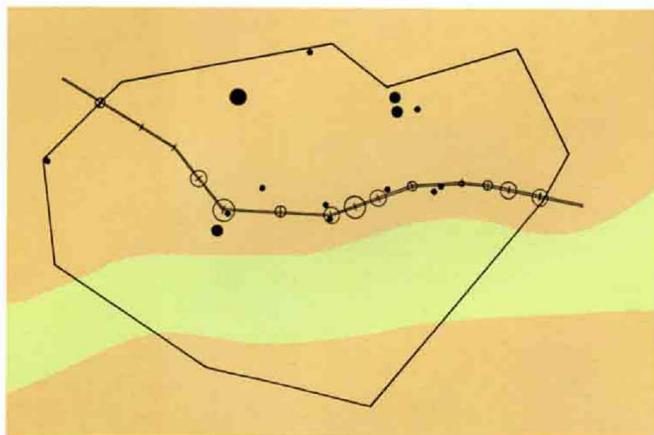
クマタカもイヌワシも快晴や晴の時によく飛び、曇で特に風がない時はほとんど飛びません。しかし雪が降る中でも、風があったり、晴れ間の断続するような時は、飛んでいます。体の大きな鳥ですから、上昇気流を利用したり、風を利用しなければ長い距離を飛べないのです。

調査していた時間の約半分は姿を確認できていた、あるクマタカをつがいの行動の分析から、ほとんどの時間は止まっていることが分かりました。図は、そのつがいの行動圏と止まり場所の分布を示したのですが、林の中の木のみならず鉄塔にも非常によく止まっています。本来は木を止まり場所にしていますが、たまたま鉄塔もクマタカに都合のよい位置だったものと考えられます。

鉄塔はよく見える場所なので、止まっている時の行動がよく分かります。下の方をきょろきょろと見る事が多く、飛び立って急降下したりしていることから、餌を探しているようです。また隣に行動圏のあるクマタカやカラスなどを追い払っていることから見張り場ともしています。その他、羽づくろいや交尾などが観察されます。飛び立ってからは、林の中をぬうように進み、次々と

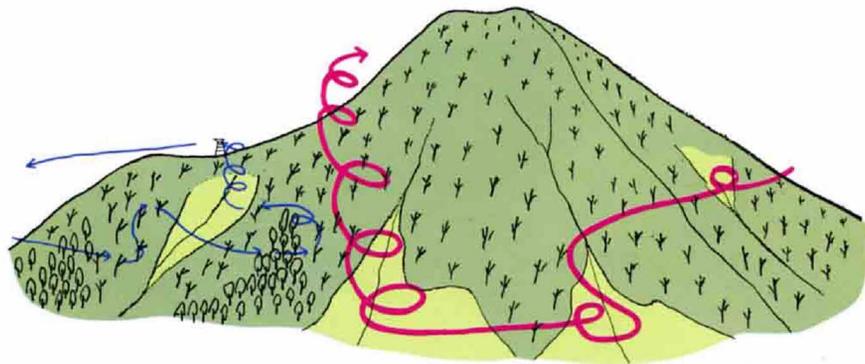
木を止まりかえながら移動して餌をさがしています。

イヌワシは、白山地域では高茎草原や崩壊地など、木のあまり生えていないところで餌を捕っているのが観察されています。草原のすぐ上空をゆっくり飛びながら餌を探し、旋回上昇して次の草原のあるところへ移っていくことを繰り返しています。木に止まっていることの多いクマタカよりも、飛んでいることが多いようです。



クマタカのつがいの行動圏と止まり場所分布

(黒丸は木、白丸は鉄塔への止まり。茶色部分  
は山地の森林、緑色部分は平地。  
15日間、約90時間の観察による。)



クマタカ(細線)とイヌワシ(太線)の行動様式模式図  
(緑色部分は森林、黄緑色部分は草原)

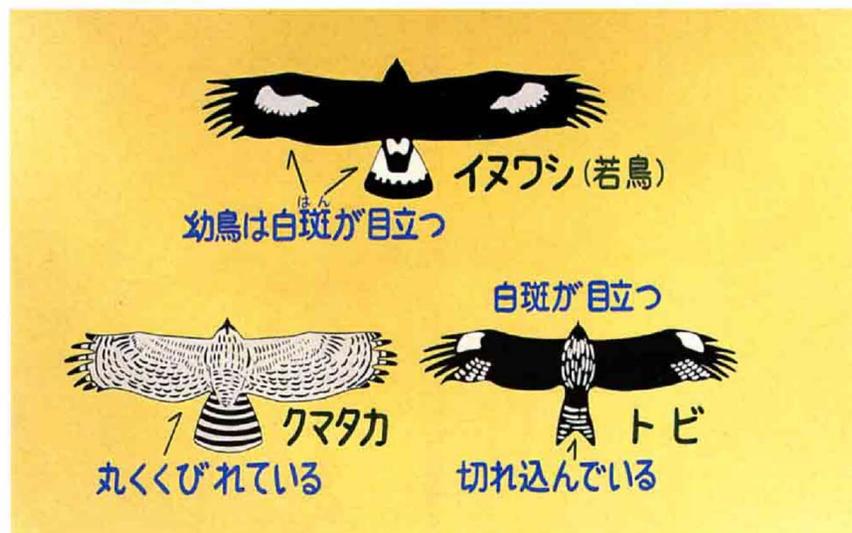
## クマタカとイヌワシを見つけよう

### 識別点

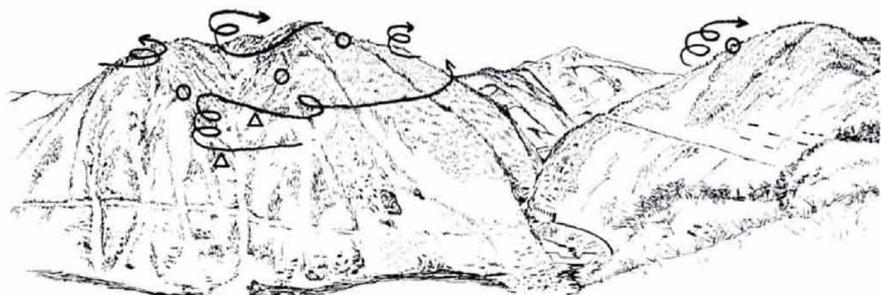
白山の山の中で空を飛ぶ大きなワシタカ類としては、冬期に稀に見つかるオジロワシの他はクマタカとイヌワシ、それにトビくらいです。トビは、麓から白山の山頂まで、ごく普通に現れます。そこで山に入る前にまず、どこにでもいるトビの飛んでいる姿をよく観察して、その特徴をおぼえることです。クマタカやイヌワシが遠くを飛んでいる時に、最もよく間違えるのがトビです。トビの特徴は、尾羽の形と翼の前縁の白斑です。それにクマタカやイヌワシに比べると、飛び方に安定感がなく、よくふらつくことなどです。トビでないことが分かれば、あとは3ページで述べたような違いで、2種を区別すればよいでしょう。

### 季節

次に、いくら一年中同じ地域に生息しているといっても、よく見つけられる季節とそうでない季節があります。季節によって行動が違うことと、背景となる山の色が変わることで、見つけやすかったり、見つけにくかったりするからです。白山ではイヌワシの場合は11月から1月ころが、活発に飛行する上に落



イヌワシ、クマタカ、トビの識別点



ブナオ山観察舎周辺でのイヌワシのよく観察できる場所

(○は止まり場所、△はノウサギと死んだカモシカを食べていた所)

葉して雪で白くなった林を背景にするので、最もよく見つかるでしょう。クマタカは12月から3月にかけての時期です。2種ともこの時期を過ぎると、雌が巣にこもるようになり、雄の動きも巣を中心とした、それまでより狭い範囲となり、発見しにくくなります。この時期は天気あまりよくありませんが、そんなときのたまの好天時が最も見る確率が高いでしょう。

## 場 所

場所としては、クマタカは手取川の鶴来町以南の中流域、イヌワシは支流の上流域です。特にイヌワシは、ブナオ山観察舎や中宮展示館がお勧めです。ブナオ山観察舎周辺は、つがいの境界にあたる場所となっています。今までに何度も、同時に別のつがいが出現しています。観察舎から見た周辺の山の、よく出現する場所と飛行コースを、いくつかの例を示して図にしましたので参考にしてください。

## 探し方

クマタカもイヌワシも山の鳥なので、高いところへ上れば近くで見られると思いがちですが、高いところから見ると、姿が山の斜面にとけ込んでしまい、見つけるのは非常に困難となります。一番見つけやすい方法は、空をバックにしたときです。そこで谷の中で、上空ができるだけ広く見渡せる場所に観察点を設け、山ぎわを探すことです。生息している場所なら、半日もいればそのうち空に姿を現すはずですが、クマタカもこの方法でよいのですが、行動様式のところで述べたように、どこかに止まっていることが多いため、もし鉄塔や目立つ大木（特に枯木）などがあれば、一通り探してみるのがよいでしょう。

## ワシタカ類の保護

### ワシタカ類の現状

イヌワシの保護を目的に、ボランティアでさまざまな活動をしている日本イヌワシ研究会という団体があります。会員の多くは、ワシタカ類を見つける素晴らしい目の持ち主で、休日のほとんどをイヌワシの観察にかけている人が何人もいます。そこでは毎年の全国各地のイヌワシの繁殖状況を取りまとめているのですが、最近は繁殖の成功率が低下しているということです。イヌワシにとって、すみにくい環境になりつつあることに間違いはないでしょう。

もともとは、山の中で不自由なく生活していたはずですが、皆伐と針葉樹の一斉植林や車道、ダム、スキー場などの建設で、餌となる動物が減少したり、静かだった奥地まで一年中、人がたくさん入るようになったことなどが原因と思われる。林の中で営巣するクマタカと比べると、今日のように簡単に奥地まで行けるようになると、イヌワシの営巣地は人目にさらされ易い場所なので、より影響が強いと考えられます。

近年はイヌワシだけでなく、例えば丘陵帯で盛んに行われているゴルフ場をはじめとする開発地で、次々とオオタカなどの営巣地が見つかり、その保護について盛んに論議されています。全国的な自然保護の考えの広まりとともに、特にワシタカ類について、行政側が保護に向けての調査を組むようにもなりました。イヌワシだけを例にしても、大分県、福井県、秋田県、群馬県、福島県などで問題になり、調査が行われています。そして森林伐採の中止や、林道のルートの変更、開発の一時凍結などが実施されています。

### 保護の必要性

自然の中では、生き物どうしが、食べたり食べられたりの関係（食物連鎖）で、全体が網の目のように交わっています。土壌の上に育つ植物（生産者）があり、その植物を草食動物（第1次消費者）が食べ、その草食動物を肉食動物（第2次消費者）が食べ、それをさらに高次に位置する動物が食べます。そして、それらの排出した糞や死体は、土壌の中の生き物（分解者）が食べて土の中の養分としてたくわえられます。それぞれの生き物に役割があり、どれかがいなくなってしまうと必ず困る生き物が出てきます。けっしていなくてよい生き物はないのです。

このような関係の中で、ワシタカ類の多くは、彼らが生息している場所の自然の頂点に位置しています。その自然の質や量によって、すめる種類が決まってきます。クマタカやイヌワシのような体の大きなワシタカ類は、それに見合う豊かな自然があってはじめて生きていけます。ブナ林をはじめとする豊かな森に、多くの鳥や獣が生息しているから、すめるのです。またクマタカやイヌワシがいるから、それら生き物が増えすぎることなく、バランスのとれた自然が保たれているのです。その中で私たち人間は、さまざまな恩恵を受けて暮らしていけるのです。

## 保護のために

近年はワシタカ類を観察する人が出てきたり、その保護について関心が持たれるようになってきたおかげで、ようやく少しずつ生息が明らかになってきました。しかし、ワシタカ類の調査がされているところは、全国的にはまだまだごく一部に限られています。きっと存在が知られないまま、すみかを追われたワシタカ類も多かったはずです。

ワシタカ類を保護していくには、困難で時間のかかることですが、まず前もって分布と営巣地の発見など基礎調査を広く行っておく必要があります。

生息が確認できると、餌の動物の生活場所となる森林（広葉樹林や混交林）をできるだけ残したうえで、営巣地の保護が最も重要となります。巣を架けるに適した大木や岩棚などは、きっと多くありません。一か所でもなくなると、生息できなくなることもあります。人間活動を避ける傾向が強い鳥ですから、巣だけでなく、周辺環境もできるだけ広くよい状態を保つ必要があります。

クマタカには、例えば植林には向いていないと思われる急峻なところの林、特に営巣地となりやすい山の中腹の急斜面の大木のある林は残すべきでしょう。またイヌワシでは12月～5月、クマタカでは1月～6月くらいにかけての繁殖の重要な時期は、人が近づいたり、工事などで騒がしくならないことが大切です。

この他に、場合によっては巣を人工的に補修したりする、積極的な対策も必要でしょう。また写真を撮ったり、近くで見ようとむやみに巣に近づくことのないようにしなければなりません。ここに紹介された巣の写真は、すべてテントに隠れるなど、できるだけ影響がないよう気を使って撮影されたものです。

## おわりに

白山地域には、今のところクマタカもイヌワシも比較的多く生息しています。自然環境がよいのはもちろんのことですが、急峻な地形と冬期の多雪で、彼らにとって一番大事な繁殖期に、人を近づけなかったことが、彼らを守ってきた大きな要因と思われます。ともに以前は、なかなか見ることのできない鳥と思われていましたが、案外身近なところにいることが分かりました。特にクマタカは、山麓の各集落近辺には必ずといってよいくらい生息していることが分かりました。ブナオ山観察舎や、山麓の集落あるいはドライブに行った山の中で上空を探してみてください、きっとどこかを飛んでいるはずです。

クマタカもイヌワシも、全国的には数は少なく、ともに平成5年4月から施行される「絶滅の恐れのある野生動植物の種の保存法」で国内希少野生動植物種に指定されているように、絶滅が心配されている鳥です。昔から生きてきた、これら貴重なワシタカ類が、これからも私たち人間と共存していけるよう、見守っていききたいものです。

なお表紙および本文の写真を使用させていただくとともに、貴重な助言をいただいた、福井県若狭地方で長年鳥類を調査されている久保上宗次郎氏にお礼申し上げます。

文・構成 上馬 康生  
写 真 久保上 宗次郎 (K)・浦田 淳 (U)・上馬 康生

---

白山の自然誌 13  
クマタカとイヌワシ

発行日 平成5年3月25日  
発行 石川県白山自然保護センター  
石川県石川郡吉野谷村木滑  
Tel. 07619-5-5321  
印刷 榎橋本確文堂

---

